第七節　吉野川氾濫原

吉野川によつて形成された地域で、大野島と伊月の大部分と粟島の全部がこれに属し、今もなお形成されている最も新しい地層である。

阿波郡林町の岩津は、もと対岸の麻植郡川田町に属して高越山麓の種穂山につゞき、その間は凹所で、吉野川は岩津の北を繞つて流れ、前記の凹所は洪水毎に溢流する程度であつたのが仁和二年（八八六）八月・承徳二年（一〇九八）八月の大洪水のとき、その凹所を突破して現在のような流路を作つたといわれている。思うに拝原谷（曽江谷）から押出す砂礫が長峯の南麓に堆積して、吉野川が岩津崖下を曲流するのを妨げ

たのと同時の結果であろう。岩津北方の凹所と同東北方の田畑の配置を観察すれば承徳二年（でなくてもよいが）の流路変更は承認出来る。

吉野川の旧流路は、市場町田淵から本町に入つて大野寺南方・王子神社前・松尾神社南方・尊光寺横に至る連続した崖（扇崖）が北端であつた。

吉野川氾濫原に流下した扇状地の鶯谷・柿ノ木谷・吉友谷・指谷・日吉谷・九頭宇谷はすべて直角に東折しているのは、過去に於いて吉野川の流路に支配された証左である。

大野島・伊月の地域は、近い過去においても何回も水害を蒙つた。大野島の厚田嘉次郎の証言によると明治三十一年の洪水のときには田淵の堤防（改修前）が切れて、現居住家屋の畳上二尺位侵水した。（田面との比高二米）この水害を被つた地域は地形図上二五米以下の部分である。大野島・伊月地域が水害を蒙つたことを示す特色として、この地域の屋敷地は田面より高く築きあげ、家屋は一段高い地盤の上に建てられ、床も高い―城郭的家屋―、しかし今では築堤の結果過去の家屋形態の遺物化した観があるように見える。がその効果は今もなおつづいている。というのは、本流が大水の節は、柿ノ木谷等の流水が本流へ注入を妨げられるために、堤防内で横溢するときがあるからである。（口絵伊月水門参照）

扇状地の人々はこの地域を「島地（しまぢ）」といゝ、この地域の人達は洪積層台地を「山路（やまぢ）」といつている。

大野島・伊月地域は一様に平坦ではなく、大野島ではほぼ中央に、伊月では南にかたよつた部分に心持高いところが東西につづいていて、住家はその部分にある。また大野島のこの部分は、近い過去では藍作をしたが、それが桑園に変わり、今では水田に変貌した。

この地域の東部に流下している九頭宇谷川は、模式的な天井川で水無川（又は涸川）であるが再々破堤して田畑を荒したが近時修増が完成した。特に善入寺川に注ぐ右岸方面に力が注がれている。（口絵伊月橋参照）

吉野川の北の分流を善入寺川という。川の名の起源はもと善入寺があつたためである。「善入寺跡、香美宇善入寺、近藤源四郎屋敷から東南約一町許、善入寺川原の中が其所在跡で、古は大寺であつたと。創立廃絶共に年代不詳である」（市場町史・近藤有地蔵・昭和四年刊）

善入寺川は日開谷川が吉野川に落ち合う辺から分れ、市場町香美から、本町の大野島・伊月の南辺を流れ、土成村郡の南辺を過ぎ、柿島村で吉野川と合流している。この間約六キロである。現在は狭長な水路―というよりは一年の大半は流水は殆んどない―であるが、今から百七、八十年前（第十二代藩主蜂須賀治昭）までは、この善入寺川は水量が多く、市場町香美の納屋浜は地名が示しているように、善入寺川を経て上下した船が着いて賑わつていた河港であつた。天明三年（一七八三）の「阿波郡図」（大野島・大塚明蔵）（口絵参照）によると水路が明白に記入してあるし、現在の大野島橋の西方と思われる地点に大きな淵を描いてある。地理調査所発行の地図によつて吉野川と日開谷川との落合点を見ると、日開谷川から押出す砂礫のため、善入寺川の分流点が埋まつて現在のような水流となつたことが首肯出来るであろう。

善入寺川は、平常は広い磧であるけれども、一旦大雨にあうと濁流は川幅一ぱい―一年に数回は善入寺島全域にも冠水―に満ちる。ここに昭和二年頃まで民営の仮橋があつて、片道一銭の橋賃を徴収していたが、後に組合の仮橋（口絵参照）が出来た。しかし仮橋は少しの出水でも流失して、渡船や徒渉しなければならなかつた。昭和二十八年現在の沈水橋（口絵参照）ができて、これらの不便は解消した。

善入寺川の水路の変化は面白い。筆者がこの川を毎日通過するようになつたのは、大正十四年春からのことであつたが、現在の沈水橋の東方三〇〇米の地点で、磧の南端に水路の最深部があつて、そこに仮橋があつた。ところが出水毎に水路は北に移動して、南に磧が出来、それが段々広くなつた。昭和十年頃から水路はまた南に移つて、昭和二十年頃には磧の南端に達したが、その後また北に移動して南の磧が広くなつている。（昭和二十九年現在）古歌に大和の飛鳥川流の変化を「昨日の淵は今日の瀬となる」と詠んでいるが、川流の変化は飛鳥川に限つたことではない。（次に「善入寺島」のことを記す順であるが、それは別項「粟島の地理と歴史」に記したのでその項を参照）

吉野川は「四国三郎」の別名で親しまれている四国第一の長流（流程二三六粁・流域面積三七〇〇方粁）で、本町の南端を西南から東北に流れている部分は約三粁・川幅は約一粁あるが、平水時は磧と流水部とが凡そ半々である。平水時は流れは緩かに水は澄んで、春夏秋には釣する人、網打つ人があり、特に鮎は名高い。

冬の渇水期の流水幅は約二〇〇米であるが、春の雪融・梅雨・夏秋の台風のときには濁水滔々として、時には粟島に冠水し、善入寺川を含めた幅二粁を満たすことがある。流水量は毎秒渇水期は二千立方米、洪水時は十四万千八百立方米、上流から運ばれる土砂は年に六百万立方米と計算されている。

吉野川は通常の洪水でも物凄い。渡船が四五日杜絶することは今も変わりがないが、今のように阿波郡の東西交通に自動車が利用されなかつた昭和五、六年頃までには郵便物でさえよく遅延し、遅配されたものには「川支」という黒印が捺してあつたものである。当時八幡郵便局の郵便物は局員が阿波川島駅へ逓送していたが、少しの出水でも渡船夫は逓送人を待合わせたため筆者や徳島への通学生は度々西麻植駅の発車に乗遅れたものである。

また洪水のときは吉野川を挟んで南北に自宅と勤務先が分れている学校職員等は遠く穴吹橋等を迂回しなければならなかつた。しかしこれらは、徳島バス・国鉄バス並びに中央橋の開通で全く解消された。

吉野川の水路は現在（昭和二十九年）北半にあつて、南半は広い磧となつているが、これも筆者が渡りはじめた大正十四年頃には、今の渡船地点の西方約五百米の旧渡船場地点では、今の南半の磧は流水部で、その南端に最深部があり、今の流水部は広い磧をつくつていた。それが出水毎に流水部が北に移り、南に磧が出来漸次広まつたが、やがて流水部が移動して南半を占めた。一組合の仮橋（口絵参照）が今の渡船場の所に設けられたのはこの時期（昭和五―十四年）で南端に狭い磧と北半が磧であつた―しかし流水部は再び北に移り、南半は磧となつている。当時渡船賃（長い期間片道二銭―豆腐が五銭の時代である）を出していた。仮橋の時代も橋賃（片道二銭）を支払つた。太平洋戦争後渡船賃も上昇する一方であつたが昭和二十六年に県営渡船となつて無賃となつた。二十四年間ほとんど毎日のようにこの渡船に御世話になつた筆者は、あの人この人と脳裏に浮かぶ代々の渡船人が皆明朗で親切であつたことをこの際記して深い感謝の意を表して置く。

さて眼を南堤防の南に移す。そこはもと粟島字前須賀の一部の粟島新田であつた（後に麻植郡西尾村―今、鴨島町―）のは何を物語るものであろうか。また堤防と国有鉄道との中間（その辺がもとの八幡町と西尾村境）に低い所がありそれが東へつゞいているのは何を物語るものであろうか。この地域の東北に江川が湧出して東流している。これ等は吉野川の分流の南端がそこにあつた頃郡境がきめられたのではないだろうか。そしてその分流や善入寺川分流の水勢が衰え、同じく分流の一つであつた今の吉野川に流水が集つたと推考するのである。

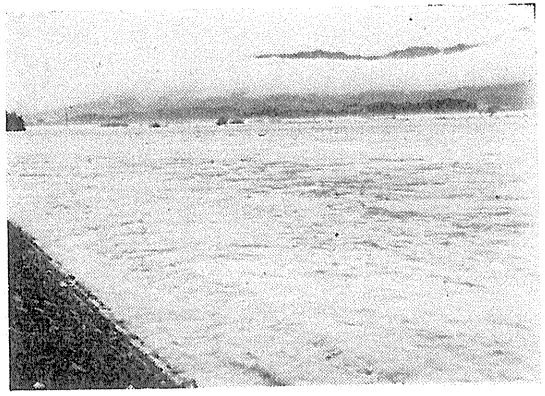
第六節　現　　状

粟島にあつた鎭守神社の祭礼は九月十八日で相撲が催され、八条神社は翌十九日が祭礼で木偶芝居が開かれて村民が喉自慢を競つた。この両社は他の小社と合祀移転して粟島神社として八幡神社の西側に祀られ、旧六月晦日には木偶芝居を開催している。また村の中央には瓦葺二階建の粟島小学校（一時高等科も併置）があり、巡査駐在所もあつて、人家が蝟集していた。しかし全島民が移転した後の善入寺島は、かつてのそれらの跡は漸次崩壊して、今は古老達がようやく指点し得るに過ぎなくなつてしまつた。ただ西瓜が栽培される頃になると番小屋が急造されて一時賑やかさをとりもどす時があるに過ぎない。

最後に、昭和二十九年の大洪水を記して置こう。九月十三日午後九州南端に上陸した台風十二号のため八幡町では同日朝から降り出し、十四日払暁にようやく止んだが、吉野川は刻々増水して、十四日午前九時頃には大豪水のため粟島はただ満々たる水に蔽われて水底に没し、残るものは北岸の籔と所々に点々と孤立する数本の樹木だけで、他はすべて水神の荒れ狂い洗い奪うのにまかせるだけであつた。高さ七米に及ぶ北岸堤防も、大野島橋の真北では水位五米七〇を示し、西方の六十間堤の所では堤防面下は一米にも足りない部分を残すだけになつた。この大洪水は吉野川改修工事完成以後最大のものであるばかりでなく、故老の証言では八十一年目ということであつた。殊に吉野川水を西から真正面に受ける六十間堤は外側に漏水するところが数十個所も生じたので、九時頃に警鐘が打たれ、附近の男子は勿論町長・町議会議長・役場員・消防団員は現場に参集して、トラツクで砂嚢を運んで投入、杭を打ち込む等の応急補強工事をほどこした。そのうち水位は十時頃から下りはじめたのでよう

やく愁眉を開いたわけであつた。この時濁流渦巻く一望の吉野川を眺めた人は、もし善入寺島に人家があつたら姑息な改修工事をほどこしていたのであつたら人畜家財は、瞬間風速四十米を超えた烈風―現に堤防の風下に当る東島でさえ倒壊家屋が四軒あつた―とこの大洪水のために、貴重な人命は失われ、汗膏の結晶である家屋家財は流亡の憂き目を見たであろうと、等しく感じたに相違あるまい。

第　３　８　図



洪水時に水没してしまつた粟島